

MRI 拡散強調像にて脳梁膨大部に可逆性 高信号域を認めた低血糖性片麻痺の1例

かき ぼ とし あき やま もと よし たか やま もと く み
垣 羽 寿 昭 山 本 悦 孝 山 本 公 美
よし おか さ どう とし あき
吉 岡 かおり 佐 藤 利 昭

キーワード：MRI 拡散強調像，可逆性高信号，低血糖，片麻痺

要 旨

症例は35歳女性。1型糖尿病およびバセドウ病の診断で当科外来通院中であった。X年6月22日起床時に左上下肢の筋力低下を自覚したが、朝食摂取後、1時間程で軽快した。同月24日起床時に呂律困難と左上下肢の動きにくさを自覚するため、当院救急外来を受診した。受診前の血糖自己測定において42 mg/dL と低値であったため、糖분을摂取していた。受診時には上記症状は改善していたが、左下肢の失調性麻痺が残存し、頭部MRI検査において脳梁膨大部病変を認め、脳梗塞が疑われ入院となった。発症3日後の頭部MRI検査において脳梁膨大部病変は消失し、急性期虚血性変化は認められず、第4病日に後遺症なく退院した。急性期に拡散強調像で脳梁膨大部の可逆性高信号域を確認し得た低血糖性片麻痺の1例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

はじめに

低血糖により生じる神経症候は、通常、意識障害など中枢神経全般の機能低下によるものが一般的であるが、一方で、脳卒中様の片麻痺を呈する症例も散見される。低血糖脳症の画像所見として、頭部MRIの拡散強調像（diffusion weighted image; DWI）において内包後脚、脳梁膨大部、放線冠などに高信号を呈することが報告されてい

る。今回筆者らは、急性期にDWIで脳梁膨大部の可逆性高信号域を確認し得た低血糖性片麻痺の1例を経験したので、文献的考察を加えて報告する。

症 例：35歳，女性。

主 訴：呂律困難，左上下肢の動かしにくさ。

現病歴：1型糖尿病（18歳時発症）およびバセドウ病の診断で当科外来通院中であった。X年6月22日起床時に左上下肢の筋力低下を自覚したが、朝食摂取後、1時間程で軽快した。同月24日起床時に呂律困難と左上下肢の動かしにくさを自覚するため、当院救急外来を受診した。受診前の血糖

Toshiaki KAKIBA et al.

松江赤十字病院糖尿病・内分泌内科

連絡先：〒690-8506 島根県松江市母衣町200

松江赤十字病院糖尿病・内分泌内科